

総括討論

櫻井里穂(広島大学 CICE 准教授)

それでは、総括討論の方にこのまま移らせていただきたいと思います。皆様、もう一度、このプログラムで確認をしていただきたいと思います。本日のパネルセッションのテーマは2015年以降、日本は国際教育協力分野においてどのような貢献が出来るのか。最後の総括討論のところでは、こちらのテーマに沿いまして、基調講演者のお二方の先生方、またパネリストの先生方、それぞれに、本日のフォーラムからご理解された、若しくは学ばれた今後の日本の国際教育協力に向けて重要だと思われるポイントを、それぞれお話していただきたいと思います。あいにく、少し時間が押しておりますため、基調講演の先生4、5分程度、パネリストの先生、3分から4分程度で、短い時間ではございますが、もう一度テーマに戻りまして、本日のフォーラムから学ばれたことをそれぞれお話いただければ幸いです。皆さんの一番右側にいらっしゃいます、インブガ先生、牟田先生、萱島さん、ウレップさん、シャルマルさん、最後に吉田先生という順番でお願いしたいと思います。宜しくお願い致します。

マベル・インブガ (ジョモ・ケニヤッタ農工大学学長 (ケニア) RUFORUM Network 議長)

3つ申し上げます。まず、日本が2015年以降、どのように貢献できるかですが、日本の大学が外国の大学とオープンに交流をするべきだという提案があったことをうれしく思います。非常に重要なことと思います。これによって日本の大学は国際化するでしょうし、外国の大学も国際化するでしょう。学生と教職員の交流という点で、非常に重要だと思います。特に日本の大学と世界の大学の交流を推進することになります。これは協力の新しい分野です。このような交流は推進すべきですし、広げていくべきです。

第2に、JICAと日本政府は地域の活力を推進しています。地域の活力は今、非常に重要で、JICAや日本政府は一つのセンターを活用して多くの他の地域と交流しています。これによって、教育を世界に提供するネットワークの拡大につながっています。現在、私たちはai-Japanプログラムを通じて22か国と協力しています。これはアフリカの半数以上の国をカバーしています。もしこのプログラムが推進されたら、他の国々もJICAと日本政府のプログラムのインパクトを受けます。地域の活力は非常に重要です。また日本政府が高等教育により多額の資金を提供していることを知り、うれしく思いました。我が国の政府がやっていることと反対です。我が国は基礎教育と中等教育に多額の資金をかけ、大学は手薄です。Education 2030によってこれは変わります。高等教育にも力を注ぎ始めています。すでに申し上げたように高等教育も同じく重要だからです。SDGsで初めて大学が取り上げられました。MDGsには入っていませんでした。大学の役割が認識されて本当によかったです。科学・技術・工学・数学(STEM)の分野も推進する必要があります。開発途上国が発展するためには産業化しなければなりません。STEMの分野で能力を構築しないと産業化できません。前進するためには、これらの分野が非常に重要です。

最後に、バングラデシュでは男子よりも女子が多く合格しているのを知ってうれしく思いました。非常に勇気づけられます。バングラデシュで女子の方が男子よりも成績がよくなったのは、どのようなことをされたのでしょうか。ケニアでも長年、同じ問題で苦勞しています。ケニアでは、「男ができることは、女も男より上手にできる」というスローガンを打ち出していると思います。今では女性がしり込みするようなプログラムに、より多くの女性が参加するように呼び掛けています。たとえば電気電子工学などのプログラムです。40人のクラスに2人しか女子がいません。2030年に向かって、このようなことに力を入れる必要があります。STEMに力を入れ、ジェンダーの格差を解消しましょう。女子を落ちこぼしません。2030年に向かって、農業、アグリビジネス、農業の機械化をめざしましょう。アフリカは基本的に農業中心なので、これらの分野が非常に重要です。農地に行くと女性がいます。女性を解放し、他の役割を果たせるようにしたいと思っています。馬が耕作に使われる畑にいるのではなく、農業を機械化すれば、女性を解放できるでしょう。アグリビジネスも大事です。小さな器具が家事を代わりにしてくれます。電子レンジができて生活が変わったように。同じように、農産物を現地で加工できます。アフリカの人々は半製品や完全加工製品を輸出し始められます。そういうことが非常に大事だと思いますし、できるはずです。JICAが今後めざしている方向に心から感謝します。次の5ヵ年計画を示していただき、ありがたいです。それに対して我々も連携してゆきます。この機会に日本政府のアフリカに対するご支援に感謝したいと思います。TICAD VIに皆様、ぜひご参加ください。非常に重要な会議です。初めてアフリカで開催されます。他のどこでもなく、ケニアであります。ケニアは主要なパートナー国だからです。ケニアに来れば、ケニアを通じて必ずすべてのアフリカにアクセスできます。ご清聴ありがとうございました。

牟田博光（東京工業大学名誉教授）

ちょっと違うお話をさせていただきますが、私は今、ミャンマーの教育省の政策顧問で、年間約7か月ミャンマーで暮らしています。昨年、7月、8月には大洪水が起き学校が大変大きな被害に遭い壊れてしまいました。日本政府にはそれらの学校の復興を中心とした支援ということで、50億円を用意していただき復興支援をして下さることになり、色んなスキームを使って、学校復興の支援をしようという話になりました。私がミャンマーにおります時に最初に聞いた話には、JICAは一般無償の形で学校を建てるということで、私が教育省の次官にお目にかかって、日本の方針をお伝えしました。そうしたら、教育次官は、それは困る、と仰いました。お前はナルギスを知っているか、ナルギスとはサイクロンの名前ですが、以前ナルギスというサイクロンが来て、学校が被害にあった時に、日本はその復興の支援を一般無償でしました。いわゆる、サイクロンシェルターと呼ばれているサイクロンが来ても一般の学校が地域住民の避難所にもなるような立派なコンクリート性の高床式の学校を作ったわけです。一般無償というのは、非常に立派なものが出ますが、色んな手続きがあり、時間が掛かる。そして、最終的にナルギスの復興支援で予定していた学校の半分しか出来なかったんです。なぜ出来なかったかと言うと、2、3年掛かっていますから、自分

の力、あるいは他のドナーが作っちゃうということで、待てなかった。もちろん、出来たものは立派なものが出来たのですが、半分しか出来なかった。ああいうことでは困る、災害の支援というものは、直ぐに効果が出なければ困る、財政支援でやってくれと言われたのですが、日本は財政支援ではしないことになっている。希望は伝えるけれども、なかなか難しいと思いますと先方に伝えて、日本に希望は伝えました。それから、日本でどのような議論があったかは私には分かりませんが、最終的には JICA の支援は財政支援型でやって下さることに決まりました。それを聞いた時に、私は、JICA も外務省も随分変わったんだ、随分フレキシブルになったんだ、と非常に嬉しく思いました。もちろん、教育省も大変喜んでくれました。他のドナーも、JICA は財政支援をするけれども、大丈夫なのか、お金を渡して消えてしまわないか、本当に入札はするのか、或いはプロキュアメントのドキュメントに基づいてプロキュアメントはするのかと心配して下さいました。JICA はこの財政支援をするに当たり、専門家を二人付け、その方々の指導のもとで、基本的には向こうが建てるのですが、例えば入札とか、物品の購入とかはきちんと国際的基準で出来るように指導しながら、この財政支援型で早い時期に学校の復旧をやるということになりました。一年位で学校が出来ると思いますが、この次に別の形の財政支援ということになれば、もう仕組みが出来ていきますから、あまり心配しないで出来るんだろうとっております。私は財政支援が何が何でも良いと思っているわけではありません。しかし、日本が持っている無償、技術協力、有償に含めて、財政支援も一つのツールとして自由に使えるようになって、技術協力と財政支援と組み合わせるとか一つの組み合わせることができる手段を増やしたという意味で大変良い example になったと思います。こういう話は今日お話ししました評価報告書の中にも少し書かせていただきましたが、従来から財政支援は、顔が見えない、お金が何処に行くのか分からないということがあります。しかし、例えば、顔が見えないということに関しても、今回のミャンマーに関して限って言えば、お金は向こうに投げて向こうが学校作るということですが、幾つの学校が今どの程度出来ているかということも順次別ルートで日本の方から発信していくことや出来上がった学校にロゴマークを付けていただくことで十分顔は見えると思います。もしくは、日本がそうやって復興支援して作った学校を利用してミャンマーには多くの教育プロジェクト実施していただく。特に一番多いのはカリキュラムですが、日本が作ったカリキュラムを積極的にそこで活用していただくで作ったものが、幾らでも膨らんでいくと思います。そういうことで、JICA は色々なツールを持っていますから、色々なツールを使いながら、この教育支援をしていけば、この次の SDG s の目標達成に向けての非常に心強いやり方になるのではないかと期待をしております。

萱島信子 (JICA 国際協力専門員)

先ほど、ジョモ・ケニヤッタプロジェクトの成功の要因は何ですか、という非常に難しいけれども、大変興味深いご質問がございました。実はジョモ・ケニヤッタプロジェクトの後半で非常に重要な役割を果たした杉山専門家という人がいらっしゃるんです。ジョモ・ケニヤッタプロジェクトの後に、ケニアの理数科プロジェクトのリーダーも務め、その頃に私も何

度か仕事をご一緒にしました。その理数科プロジェクトのフェーズⅡが終わる時に、彼はここで終わるべきだと大変強く主張して、私たちと意見が割れたのです。普通、プロジェクトリーダーであれば、終わりにしようと言う人はほとんどいません。JICA から見ると、今止めると、ようやく始まった大規模な全国展開の教員研修は止まってしまうんじゃないか、JICA の支援がないと継続されないのではないかという不安があり継続を主張したのですが、彼は頑として止めると主張したんです。ここでプロジェクトの活動が止まるなら、一回止まるそのことが大事なんだ、そこから自分の力で立ち上がってこそ、プロジェクトは成功するんだというのが彼の主張でした。これは単なる一つのエピソードですが、私を感じるの、例えば JICA のレポートを見ると、何をたくさんやったか、どれだけやったか、JICA のポリシーポジションペーパーも外務省のポリシーペーパーも何をどこまでやるかについて書いています。グローバルモニタリングレポートにもどれだけ資金を集めて途上国につぎこむか、ということが書いてあります。でも、本当にそれだけが必要なことなのか、むしろ何をやらなかったのか、何処で途上国側にハンドオーバーしたのか、実はそれも大事なことじゃないかな、と思う時があります。ドナーとしては、こんなにたくさんやるぞ、やったぞと言わないといけないわけですが、途上国の力を信じる、途上国の人たちが立ち上がっていく力を信じる、ということもあわせて大事なのではないかと感じています。彼らが自分の足で立ち上がるのを待つことが大事で、信じて、待って、もし一度転んでも、まだ待って、必要な支援だけをしながらプロジェクトを育てていくことが重要というのが、個人的な経験からの個人的な想いであります。そうやって、子どもだった途上国の機関が青年になり、一部には日本と一緒に問題話し合える時が来ているというのが私の現場での印象でございます。

ソルダッド・A・ウレップ (UP NISMED 所長)

質の高い教育をするには教員の能力を継続的に高めなければならないというのが、今でも事実です。教員研修プログラムが重要で必要ですが、まだ十分ではありません。日本は授業研究を普及することによって大きな貢献ができると思います。なぜなら既存の研修プログラムを補うことができるからです。また日本は、授業研究に関する研究もより多くできます。そうすれば、おそらく吉田先生が出された、何を探究するか、どの程度知っているか、学習をどのように向上させるかという問の一つに答えられるでしょう。授業研究によって、多くのデータを集められると思います。

シャマル・カンティ・ゴージュ (バングラデシュ農業省事務次官)

ありがとうございます。まず質の高い教育とは何を意味するのでしょうか。また、どうすれば質の高い教育が達成できるのでしょうか。質の高い教育のために、何をする必要がありますのでしょうか。カリキュラム、教科書、教員、環境、機材、学校運営、技術的なノウハウ、学校要因だけでしょうか。考えるべきことはたくさんあります。バングラデシュの教育の質を高めるために、日本政府は JICA を通じて教員研修やカリキュラム開発の分野でバングラ

デシュを支援くださっています。これはもちろん、質を向上するために重要な分野で、将来的により強化するべきだと思います。教育の専門家や管理職が日本の奨学金を得て、日本の有名な大学で学位やディプロマを得ています。それはもちろん、よいことです。しかしもっと多くの専門家が必要です。小学校5年生までで2千万人以上の児童がいます。2年間の学位プログラムを受けるためには、1千万円近い費用が必要です。もし資金が足りないなら、2年間の学位プログラムの代わりに、JICAはトレーナー研修のために専門家をバングラデシュに2、3カ月派遣することも考えられます。もし両方が可能ならうれしいですが。

もう一点、私は日本の50年前の教育状況をあまり知りませんが、私たちの教育は暗記中心です。ペーパーテストで試験に通ります。生活でどのように役立つかはわかりません。私たちは今、学習したことが学習者の生活にどのように影響を与えるか、どう役に立つかを考えています。専門家たちは他の国々と交流すべきです。教える技術だけでなく知識も必要です。人々の考え方だけでなく技術の適応も検討すべきです。全体的に、子供たちの教育に対する親の関与も必要だと思います。そうしなければ期待するほど改善できません。子供たちを学校に行かせる必要があり教育にもっと時間を使う必要があることを親に理解してもらうために、私たちは初等教育修了テストを導入しました。バングラデシュでは、70パーセントを超える親が教育を受けていないので、わからないのです。子供の将来がどうなるかもわかっていません。親は子供を学校に行かせますが、学校のことはいっつも知らないのです。子供たちが何を学んでいるか知らないで、親に学校に関わってもらうようにしています。少なくとも各期末テストが終わった後、親に学校に来てもらって、子供たちが何を学んでいるか、何を学んでいるか、子供たちの状況を担任に説明してもらうことはできると思います。

SDG達成のもうひとつの問題は、私たち全員の一体感でしたが、インブガ先生がすでに説明されました。私も昨日、同じ意見を述べました。世界中の人々がみんな、私たちは世界市民だ、これは私たちの母なる地球だ、私たちは一緒だと感じ、共に発展したいと思えば、必ず成果をもたらします。そうでなければ、役に立たないでしょうし、SDGsの目標、特に目標4を達成するのは難しいかもしれません。ご清聴ありがとうございます。

吉田和浩（広島大学教育開発国際協力研究センター長）

若干の裏話ですが、昨年、国連を舞台にSDGsが採択された際、そこに向けて色んな人が色んな所で極めて厳しいプロセスを踏んで来たんです。どういう意味かと言うと、ミレニアム、2000年になって、8つのゴールからなるMDGsが採択されましたが、8個の中に入っているセクターはまだいいんですが、その中に入っていないセクターは相当苦しい思いをしたわけです。そして、新しく2015年以降の開発枠組みを作るに当たっては、絶対負け組にならないぞという強い意気込みをもって、色んなセクターの人がものすごく強いロビイング活動を展開したんです。そういうことがあって、幸いにもその中でも教育は一つのゴールをキープして、ゴール4というポジションを得たんですが、その過程で新しいSDGsというのは、先ほどからの議論にもありましたけれども、誰かがやるためのゴール、誰かが解決するためのゴールではなくて、世界中の国々、世界中の人々にとって、universally relevant

な課題に対処するというゴールフレームワークです。Universal という言葉がキーワードになりました。それから、SDGs の D は、development とは言っていますが、発展とか開発する姿、何を指して sustainable development とするのかについても真摯な検討がされて、transformative でなければいけないということになりました。今までどおりに努力していけば、みんなが豊かになるとは限らないという痛烈な批判的教訓を持って、新しい枠組みを作ったわけです。その中で、教育分野ではインクルーシブで equitable な質の高い教育を推進していくことを決定したわけです。ただ、そのプロセスに関わっていない地球上のほとんどの人は、新しい開発枠組みは無茶苦茶難しい、訳が分からないと思ってしまうわけです。せっかく新しく掲げられたゴールですが、仮に教育分野だけを取っても、インクルーシブ、ようやくそういう表題に入れてくれたんだと思って嬉しく思う人もいれば、それってどういうことか分からないと思う人もいます。それから、従来以上に学びの改善、学びの成果が重要だ、と誰かが言ったから重要になったんだよ、と言われたところで、すべての国の人々は、じゃあ、そのように努力しようという気持ちに本当になるかどうかなんです。つまり、こういう国際的に採択されたフレームワークだからこうやるんだでは、本当の意味で自分たちの課題を改善していく、という姿勢には繋がっていかないと思うんです。これは自分たちの問題だと思って、自分たち自身に取り組んでいくというのが新しい「開発」枠組みが持っているメッセージではないかと思います。もうすぐ 2011 年 3 月 11 日に起こった東日本大震災からの 5 年目を迎えます。それを境にして、本当に甚大な被害をもたらしたんですが、一つ救いとして言えるのが、あれを契機として日本人たちの甚大な被害を被った地域に対する考え方、取り組み方、行動の起こし方のパターンが大きく変わったとよく日本の中で言われています。人の苦しみを見て自分の苦しみと思えるようになって、自分に何が出来るかと真剣に考えて、特に若者が立ち上がって、行動に移してくれたことは極めて、心強い現象だと思います。このことを私は、この場でするので、その新しい SDG4 の文脈に落として考えたいです。子どもたち、そしてすべての人たちが本当の意味での学びを通じて何かを成し遂げたいと思う想いを我々がどの程度共有出来るのか、それを自分の問題と思えるのかどうか、それに対して、私たちが知っていることをどのように活かして、一緒に参画して行動出来るのか、を真摯に考えられるプロセスがこれから始まらなければいけない。それをしない限り、あの、枕詞的に唱えている inclusive and equitable とか何度言っても自分の問題としてそれに取り組むっていうのに繋がっていかないのではないか。日本がこれから国際教育協力をしていくに当たって端的に言うと、日本の教育のどこが強みでどこが問題なのか、日本型の教育を海外にも展開していこうという姿勢を出す前に、そのことをまず理解した上で臨まなければ、国際教育協力に繋がりにくい話です。そういう自分の問題として自分の立っている足元を見つめて、そこを新たな出発点にしていくところから、日本の国際教育協力への貢献の姿というのが形付けられていくのではないかと私は思います。それについて、これ以上結論めいたことを言うつもりはありませんし、是非また皆さんと一緒に協力して、このことを考え、実行に移していということ盛り上げていくことが出来ればと考えている次第です。どうも本日は有難うございました。

櫻井里穂（広島大学 CICE 准教授）

基調講演者の皆様、パネリストの皆様、どうも有難うございました。今年で13回目を迎えましたJEF、国際教育協力フォーラム、皆様、如何でしたでしょうか。時間も既に押ししておりますので、司会進行役からは、一点だけお話をさせていただければと思います。アメリカの作家、牧師、そして教師でもありましたウィリアム・アーサー・ワード、かなり有名な方ではございますが、次のように述べております。ちょっと先に英語で読みます。The mediocre teacher tells. The good teacher explains. The superior teacher demonstrates. The great teacher inspires.”日本語に致しますと、「平凡な教師は言うて聞かせる、良い教師は分かるように説明する。優秀な教師は自らやってみせる。しかし、最高の教師は子どもの心に火を付ける。」名言であると思います。本日も基調講演やパネルセッションで出て参りました教育2030、SDG4の目標はquality education。質の高い教育です。このワードの格言は、良質な教育のための学習改善、質改善をどう促すか、そして学びの改善のためにはどうしたら良いか、という設問のみならず、例えば、本フォーラムの目指しますところの自立的教育開発、こちらをどう促すか、という設問を考える際にも役立つ格言ではないかと存じます。本日、セッションの中で出て来ました種まき、種まきをどうするか、というお話がありましたが、この種のまき方も互いに学び合おうとする時代なのかもしれません。冒頭で申し上げましたが、このフォーラムは結論を出すことを目指そうとはしておりません。本日のフォーラムが皆様に何だかの示唆を提供することが出来ましたら、主催者の一つとして大変光栄に存じます。

それでは、時間となりました。インブガ先生、牟田先生、シャマルさん、ウレップさん、萱島さん、吉田先生に感謝の気持ちを込めて、今一度拍手をお願いします。どうも有難うございました。以上をもちまして、第13回国際教育協力日本フォーラムのプログラムを全て終了いたしますが、主催4団体に代わりまして、基調講演者、パネリストの皆様、そして何より最後まで熱心に議論を盛り上げて下さいました会場の皆様に心より感謝を申し上げます。皆様、どうも有難うございました。また、このフォーラムを後援いただきました独立行政法人JICA、国際協力機構にも御礼を申し上げます。それから、終日、素晴らしい通訳で通訳をして下さいました通訳の3人の方々にも御礼を申し上げます。どうも有難うございました。それから、黒子ではございますが、マイクを会場のために回し走って下さったり、準備をして下さった学生の皆様、どうも有難うございました。JEFは、最初に申し上げましたが、4者の共催でございます。文部科学省、そして外務省、筑波大学、そして何よりも広島大学事務局の皆さん、どうも有難うございました。大変ご尽力いただきました。

発表資料

<基調講演>

マベル・インブガ

(ジョモ・ケニヤッタ農工大学学長(ケニア)/RUFORUM Network 議長)……………44

牟田 博光 (東京工業大学名誉教授) …………… 50

<パネルセッション>

吉田和浩(広島大学教育開発国際協力研究センター長) …………… 55

シャマル・カンティ・ゴーシュ(バングラデシュ農業省事務次官) ……………58

ソルダッド・A・ウレップ(フィリピン大学国立理数科教育開発研究所所長) ……………65

萱島信子(国際協力機構 (JICA) 国際協力専門員) ……………72